



⇒ 20

森脇飛騨覚書・桂炭円覚書・長屋太郎左衛門覚書・老翁物語・深瀬次郎兵衛覚書（毛利家文庫）

記録・記憶 ⑤

戦の記憶を集める

～萩藩前期の戦国軍記編さん～（1）

《毛利家文庫に残る「戦国軍記」》

「戦国軍記」とは、応仁の乱の終結後、島原の乱終結の寛永15年(1638)までの約160年の間に起きた争乱を描いた作品とも定義付けられています（古典遺産の会編『戦国軍記辞典』）。当館の毛利家文庫にも50種類を越える「戦国軍記」が残ります。江戸時代作成のものを中心に、近代の写本もあります（三卿伝史料にも近代の写本があります）。

《装丁が共通する5点》

毛利家文庫の中に、判型、装丁が共通する5点の「戦国軍記」があります。大判（28.4×22cm）で、ウグイス色のツヤがある上質の料紙を用いた表紙、文章はていねいなくずし字で書かれ、浄書本（清書本）といった趣きです。各本が扱う時期に違いはありますが、毛利元就以降の毛利家の歴史、各地での合戦、家臣の活躍などを描く点で共通し、作成時期はいずれも初代藩主毛利秀就時代です。

5点の判型は、享保11年（1726）に完成し、のち御宝蔵で保管された「閲録」（シート19参照）と同じで、表紙の色は異なりますが紙質は似ています。時期は不明ですが、この5点は、藩が重要視する「旧記」として統一的な表装が施され、のち御宝蔵に納められたものでは、と推測されます。以下、各本を紹介します。

A. 森脇飛騨覚書 16叢書5

作者は吉川家家臣の森脇飛騨守春方（市郎右衛門尉、玄道）。天文2年（1533）生れで、元和7年（1621）に89才で死去しています。

作成年代は記されていませんが、元和7年に本書が毛利家に進上されており（「老翁物語」）、それ以前の作と考えられるものです。「元就様の合戦につき知っていることを書き記すように」との命を受け作成したといえます。

内容は、天文18年（1549）元就父子の山口訪問、同20年陶氏拳兵から元



「江毛武功記」

毛利家文庫14軍事64、5冊本。大永3年(1523)元就の家督相続から永禄12年(1569)毛利軍の九州退却までを扱う軍記です。作者も作成年も記されていません。本書の場合も、過去をよく知る古老（「吾等老躰之者」）が、しきりに依頼されたことから、見聞きたことをあらまし書き記した（「及見聞之処有増書立申候事」）とするものです。これも藩政前期の作ではないでしょうか。

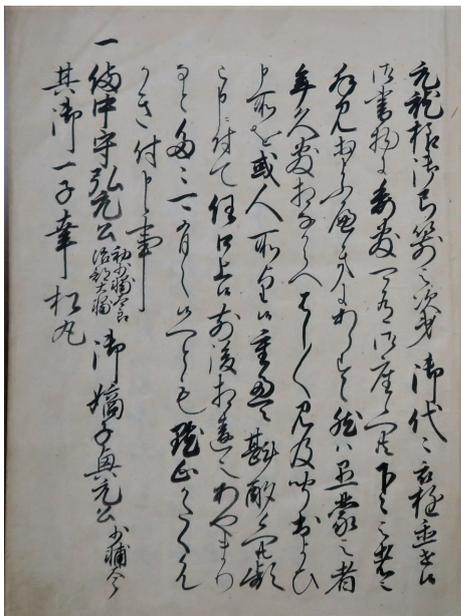
亀2年(1571)元就死去、出雲平定までを扱います。春方は天文22年、21才の時に備後・江田祝城の戦いに参戦して頸一を挙げ、以後各地で活躍しました（「森脇飛驒守首註文」〈三卿伝史料252〉）。春方39才までのことを記す本書は、老臣が50～70年前を振り返り記した回顧録といえるものです。ただし、本人自身、内容には「覚え間違いも多いだろう」と述べています。

B. 桂炭円覚書 16叢書2 (2の1)

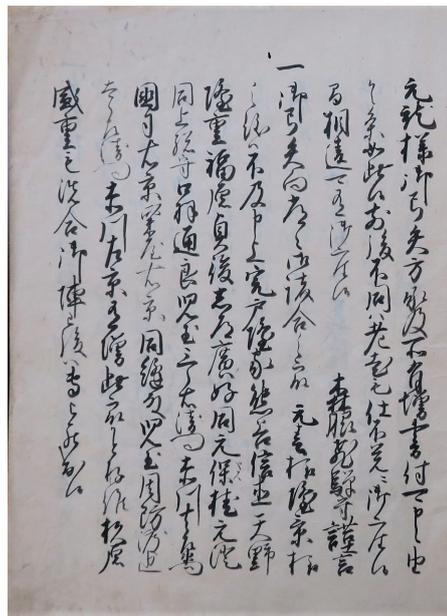
作者は桂源右衛門尉元盛（炭円）。天文16年生れ、寛永14年（1637）に91才で死去しています。穂田元清（元就四男）に仕え、のち秀元（元清長男）の補佐役を務めたといえます。息子は秀元の家臣として残りましたが、元盛は養子を迎えて毛利本家に戻り、萩藩士として活動しています（『毛利家史料集』解題、「譜録」）。

本書にも作成年代はありませんが、元和8年前後の作と考えられます（「老翁物語」）。「老翁の自分が見聞きしたことについて、『ある人』が知りたいとしきりに頼まれるので本書をまとめた」と述べています。

内容は、大永3年(1523)元就家督相続から慶長2年(1597)慶長の役までの時期を扱います。自身の経験談に止まらず、他人から聞き及んだことや、一部は他家の文書記録も参考に述べています。批評的な内容は少なく、基本的に事実を書き連ねる内容ですが、ある場面での元就の発言（「元就様御異見に」「元就様御意に」）を紹介することで、優れた武将としての元就の姿をクローズアップしようとしている部分もあります。



B 「桂炭円覚書」の前書部分（作成理由）



A 「森脇飛驒覚書」の前書部分（作成理由）

元就様御弓箭之次第、御代々被遊置せ候御書物に委敷可有御座候へ共、下々之者之拜見およふへきにあらす候、然ハ愚蒙之者年久敷相なからへ、はしく見及聞および申所を或人所望候、重畳斟酌候へ共、頻被申二付て任口上候、前後相違之あやまりなど多々可有之候へとも、黙止かたく候てかき付申候事

元就様御弓矢方承及所有増書付可申候由候条如此候、前後不同ハ老耄仕不覚ニ御座候間、相違可有御座候
森脇飛驒守謹言